



TITLE:

柳宗元詩考

AUTHOR(S):

笥, 文生

CITATION:

笥, 文生. 柳宗元詩考. 中國文學報 1962, 16: 29-55

ISSUE DATE:

1962-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177122>

RIGHT:

柳宗元詩考

寛

文 生

京都大學

序

中唐に興つた古文運動の中心として、韓愈（七六八—八二四）と肩を並べる柳宗元（七七三—八一九）は、詩人としても独自の風格をもつ作品を世に残している。そして詩人としては、同じく詩の大家でもあつた韓愈とは、同じ系列に置かれることが全くない。普通には、自然の描寫に優れる詩人として、王維・孟浩然・韋應物とともに「王孟韋柳」と並稱されている。^{注①}確かにその詩風は韓愈とは大きく相違している。例えば、韓愈は散文改革の主張と情熱を詩のなかにも持ちこみ、所謂怪僻な言葉の使用とか、詩の散文化といった面で新しいスタイルを生み出し、宋以後の詩風に

柳宗元詩考（寛）

大きな影響を与えたのであるが、柳宗元の詩にはこのような傾向はまず認められないといつてよいだろう。そもそも彼の場合、その詩が古文運動と關係づけて論じられることはない。散文との關連が論じられるとしても、永州八記等の山水遊記と山水詩との關係についてだけである。

では、柳宗元の詩は一體どのような特徴をもち、どのような點で優れるのであろうか。「王孟韋柳」と呼ばれる四人の自然詩人の中ではどのような位置を占めるのであろうか。又、彼の詩が韓愈とまつたく違つた傾向をもつのは、どのような理由に基づくのであろうか。そもそも彼は詩についてどのような考えをもつていたのであろうか。この問題は又唐代における古文運動の性格を考える上での一つの鍵でもあるはずである。

柳河東集四十五卷、外集二卷のうち、詩の占める部分はわずかに卷四十二と卷四十三の二卷、百四十六首、それに卷一の平淮夷雅二篇、唐鏡歌鼓吹曲十二篇、畧民詩を加えても百六十一首に過ぎない。この量は、韓昌黎集四十卷、外

集十卷のうち、詩が十卷、四百餘首あるのに較べるとずつと少ない。韓愈のみならず同じ時代の張籍が四百五十餘首、王建が五百四十餘首、孟郊が四百九十餘首、若くして死んだ李賀にして二百四十餘首傳わつてゐるのを見て、一應彼の場合、詩に關するかぎり算作だつたといえる。一つには、彼が三十三歳で永州の司馬に左遷される以前の詩が、その散文の場合とことなり、殆んど傳わらないことにもよるだろう。施子愉氏の「柳宗元年譜」（一九五八・七 武漢湖北人民出版社）によれば、確實なものは二首のみである。或いは、彼が友人劉禹錫に遺草を托した時に削つておいたのかもしれない。しかし、とにかく劉禹錫の編纂した集が現在傳わる通りのものではないにしても、^{注⑧}そのうちの詩が大きく失われたということはないと考えられる。現在傳わる集では、詩の排列に多少の混亂が見られることは確かであるけれども。^{注⑨}

かく長安時代の詩が殆んど傳わらないので、彼の作品は、王叔文の事件（八〇五）に連坐して流された湖南省永州司馬としての十年、更に廣西省柳州刺史としての五年ばかり

の生活のなから生み出されたものであるといつてよい。つまり彼の殆んど詩は、長安からはるか離れた「蠻夷の中」における不幸な時代の作品である。元和十年（八一五）許されて、永州から長安へと歸る道すがら、莊周の夢かと疑い、蘇武が匈奴より歸る時のようなときめきをもつて作つた詩が數首あるけれども、都へ着くと同時に、柳州刺史という辭令が待ちうけていて、十年の間待ち望んでいた喜びは瞬時に消え失せてしまつてゐる。彼の詩全體に深い憂愁がたたよい、のびのびした明るさや樂しさに缺けるのは當然なことであらう。

貞元九年（七九三）二十一歳の若さで進士に及第してから、順調に出世の道を歩んでいたのが、永貞元年（八〇五）九月、三十三歳で禮部員外郎から永州の司馬に流される破目になつた所謂「王叔文事件」については、清水茂氏の論文「柳宗元の生活體驗とその山水記」（中國文學報第二冊）に詳しい。この「永貞の變」に關する過去の評價は、王叔文一派にとつて非常に手厳しいものであり、柳宗元に對しても、大惡人の一味に加擔したとして、その人格を疑い、

ともすれば文學的業績までも不當に評價しがちであつた。

北宋初めの古文の大家歐陽脩は「韓柳」というを喜ばず、

柳宗元を韓門の罪人とまで叱責している。

唐より以來、文章を言う者は、惟だ韓柳なり。柳、豈に

韓の徒ならん哉。眞に韓門の罪人也。蓋し世俗は其の學

ぶ所の非を知らずして、第だ當時の輩流を以て之を言う

爾。

(集古錄跋尾卷八)

歐陽脩のかかる評價には、柳宗元が、孔孟の道を正しいと

しつつ、一方で釋老の道をも容認したことが大きく影響し

てはいるけれども。それはともかくとして、かような評價

が片寄つたものであり、王叔文等の行なおうとしたのは、

德宗朝下の腐敗した政治を建て直そうとした非常に革新的

なもので實はあつたこと、柳宗元は左遷されてからも、自

己の抱いていた理想と政治革新の運動が決して間違つては

いなかつたという固い信念を持ち續けていたこと、柳州の

刺史となつてから、小規模ながらある程度までかつて果せ

なかつた理想の一端を實行に移し得たことなどについても、

柳宗元詩考(寛)

一

柳宗元の詩の中で最も成功しているのは山水に關する作

品であるとするのは通説であり、最近北京大學より出版さ

れた「中國文學史」(修訂本第二冊 一九五九・九 北京人民文

學出版社)もほぼ同じ評價を下している。本論も主として

永州時代の山水詩を中心にしなから、彼の詩の特徴を考え

てゆくことにする。

清水茂氏は、柳宗元が山水記を著わした動機は、單に政

敵たちの視線の及ばない對象に怒りの感情、悲しみの感情、

抑鬱された感情を移しかえるためばかりでなく、彼自身の

生活の反映でもあつた、つまり自分と同じく不當に輕蔑さ

れ見棄てられた永州の山水のために「記」を書いてやつた

のであると說かれている(前掲論文)。しかし詩ではもはや

そのようなゆとりは殆んど見られないといつてよい。その

詩は「蠻夷の中」に陥れられた人間の怒りと悲しみ、いつ

になつたら長安に歸れるかわからない不安と焦燥に満ちて

いる。「中夜に起きて西園を望み月の上に値う」と題す

る詩（柳河東集卷四十三）を先ず讀んでみよう。

覺聞繁露墜 覺めて繁露の墜つるを聞き

開戸臨西園 戸を開けて西園に臨む

寒月上東嶺 寒月 東嶺に上る

泠泠疎竹根 泠泠たり 疎竹の根

石泉遠遡響 石泉 遠くして遡いよ響き

山鳥時一喧 山鳥 時に一えに喧すし

倚檻遂至旦 檻に倚りて遂に旦に至る

寂寞將何言 寂寞 將に何をか言わん

眞夜中に起き出して、東の山にのぼつたさむざむとした月の光の下に、ざわざわと風のわたる竹の根もとをみつめ、遠くを流れる泉の音と、時おりこだまする山鳥の不氣味な叫びに耳を澄ましながら、夜の明けるまで立ちつくした詩人。その詩人の心を蔽っている寂寞、怒つてみても悲しんでみても、まわりには聞いてくれるものとしてない、それはどうにもならない蠻夷の中だと氣づいた時のつきつめた孤独感、寂寥感が、この詩の背後にはある。

柳宗元はかかる苦痛から少しでも逃れんとして、流謫地

の山水を狂氣の如く歩きまわつた。氣をまぎらせる仕事もなく、語りあえる知識人としては僧ぐらいなものであつたらう退屈な毎日は、一層彼を山水へ追いやることになつた。しばらく彼自身の詩句によつて、苦しみの跡をたどつてみよう。

塞連困顛踣 塞連として顛踣に困し

愚蒙怯幽眇 愚蒙 幽眇を怯る

非令親愛疎 親愛をして疎ならしむるに非ずんば

誰使心神悄 誰か心神をして悄えしめんや

偶茲遁山水 偶たま茲に山水に遁れ

得以觀魚鳥 以て魚鳥を觀るを得たり

吾子幸淹留 吾子 幸いに淹留して

緩我愁腸繞 我が愁腸の繞るを緩うせよ

これは「崔策と西山に登る」（卷四十三）と題する二十四句の詩の後半であり、施子愉氏の年譜によれば、元和七年、即ち永州へ左遷されて八年の歲月が流れたところに作られたものである。單調な毎日の生活を破るべく、久し振りで文化圏からやつて來た崔策と山を歩いたのだが、詩人の心は

そんなことでは、ずみはしなかつた。最後の一聯にくるまで、崔策は彼の心のなかにはない。つまり倒れてなかなか前へ進まない、おろかな自分は前途の無氣味な暗さに恐れをいだいている。親戚友人から遠ざけられたのでなかつたら誰が私の心をこんなに沈ませられようか。たまたま山水に逃げ出して、魚や鳥を觀賞することが出来た。あなたもここに出来るだけ逗留して私の愁いのはらわたがよじれるのをゆるめてほしいと歎息している。彼が山水に遁れ、魚や鳥を觀することによつて愁いを少しでも緩めようとしたことは、わざわざここで例を擧げて證明する必要もないことではある。過去の文人たちが、失意の時に山水に接した態度も、程度の差こそあれ、おおむね氣をまぎらすためのものであつたろうことは想像に難くない。ただ彼の場合、それはあくまでも愁腸を緩めるためだけに止まるのであつて、すべてを忘れて山水觀賞にひたりきつてしまおうとか、山水のなかに隱遁してしまおうとかいうようなもので決してなかつたことは注意しなければならぬ。

滴葉殊隱淪 滴葉は隱淪に殊なり

柳宗元詩考(寛)

登陟非遠郊 登陟も遠郊に非ず

所懷緩伊鬱 懷う所は伊鬱を緩うするにあり

詎欲肩夷巢 詎ぞ夷巢に肩ぶことを欲せん

(卷四十三 遊朝陽巖遂登西亭二十韻)

自分は左遷されてこんな山の中に来ているのであつて、世を避けて隠れ住んでいるのとは違ふ。山に登るとはいつても、遠出は許されない。山水の遊びは、少しでも憂鬱をまぎらそうと思うからであつて、古代の隱者、伯夷や巢父と較べられることなどどうして願おうか、という言葉でこの詩は始まつている。ここには、山水の遊びは決して本意ではない、楽しんでゐるのではないのだ、自分としてはあくまでも政治家として生き、自己の理想を實現したいのだというひたむきな情熱が讀みとれる。知識人たちは、しばしば世俗の名利を捨てて自然の生活にとけこむことを願わしいというけれども、柳宗元は勿論そんな生活に入りたくはないし、又人から隱者の如く見なされるのを嫌つたのである。こうした感情は、大體彼の詩全體を貫いて流れているといつてよい。時おり、「農と爲ること信に樂しむ可

し、寵に居るは眞に虚しき榮なり」(卷四十三 遊石角過小嶺至長島村)と歌つたりするが、それは十年も續いた楚山の中での囚われの生活が、心の片隅にふと弱氣をおこさせたものであらう。勿論、逆境に對する反撥から、志が適えば必ずしも役人として貴い地位を求めなくともよい、否むしろ農民の生活のなかにこそ眞實の生活があるとする考えも生れつつあつたともいえるが、しかしそれはおおむね微弱である。

だんだん年月が經つてゆくにつれ、懸旌よりも激しく揺れ動いた心も自然と收まり、山水の遊びもふと本心から楽しんでゐるのではないかと、みずからの心を疑つたりもしている。「歲月は憂慄を殺ぐ、情疎にして將迎寡なく、追遊は愛する所かと疑う、且つは復吾が情を舒べん」とは、同じ詩の中の一節である。

山水の遊びがあくまで憂いの緩和のためのものであつて、遊び自體が目的ではなかつた柳宗元は、では美しい山水を眺めた時、それをさがしあてた時に、憂いをすっかり吹き拂うことが出来たであらうか。否である。山水が美しく

ば美しいほど、憂愁は却つて深まるばかりだつた。

境勝豈不豫 境勝れたれば豈に豫しまざらんや
慮分固難裁 慮いは分れて固に裁ち難し
升高欲自舒 高きに升つて自から舒うせんと欲すれば
彌使遠念來 彌いよ遠き念いをして來らしむ

(卷四十三 湘口館瀟湘二水所會)

信美非所安 信に美なれども安んずる所に非ず
羈心屢逡巡 羈の心は屢しば逡巡す
糺結良可解 糺い結ばれしもの 良に解く可し
紆鬱亦已伸 紆り鬱りしものも 亦已に伸ぶ
高歌返故室 高歌して故室に返れど
自謂非所欣 自から謂くは欣ぶ所に非ず

(同 登蒲洲石磯望橫江口潭島深迥斜對香零山)

神舒屏羈鎖 神舒びて羈の鎖を屏け
志適忘幽潺 志適いて幽潺を忘る
棄逐久枯槁 棄てられ逐われて久しく枯れ槁えしに
迨今始開顏 今に迨んで始めて顔を開けり
賞心難久留 賞ずる心は久しく留め難く

離念來相關 離れし念い來つて相い關わる

北望間親愛 北のかたを望めば親愛を問て

南瞻雜夷蠻 南に瞻れば夷蠻に雜わる

(同 構法華寺西亭)

これらの詩句を一讀すれば、もはやくだくだしい説明は不要であらう。たとえ一時的に心が舒びやかになつても、そのすぐあとからどつとわきおこつてくるさまざまな思いをどうしようもなかつた。又わざとほがらかに歌をうたつてみても、あとにはちぐはぐな感じが残り、却つて不愉快になるばかりだつたと彼は述べている。憂愁を拂いのけんとすればするほど、すばらしい眺めに接すれば接するほど、柳宗元の不安と焦燥は一層深まつていつたのである。

ここで一首章應物の詩を擧げておく。韋柳と稱しても、その山水觀賞の態度には大きなへだたりがあることは一讀して明らかであらう。

南園陪王卿遊囑 南園に王卿に陪して遊囑す

形跡雖拘檢 形跡 拘檢せらると雖ども

世事澹無心 世事には澹として心無し

柳宗元詩考(寛)

郡中多山水 郡中 山水多し

日夕聽幽禽 日夕 幽禽を聽く

几閑文墨暇 几閑 文墨暇に

園林春景深 園林 春景深し

雜花芳意散 雜花 芳意散じ

綠池暮色沈 綠池 暮色沈む

君子有高躅 君子 高躅有り

相携在幽尋 相携 携えて幽尋に在り

一酌何爲貴 一酌 何爲れぞ貴き

可以寫冲襟 以て冲襟を寫すべし

(韋蘇州集 卷七)

玄宗の恩私を恃んで派手で氣ままな生活を送つていた韋應物は、安史の亂後玄宗が崩ずると、一轉して不本意な地方の役人とならねばならなかつた(卷五 逢楊開府詩參照)。それ以後もはや自分の政治生活に大きな希望がなくなつてしまつた彼は、わずらわしい世の俗事から少しでも逃れようとして山水を求めた。身分は役人として拘檢、即ち拘束されてはいるものの、世事にはもはや澹(淡)として心無き

彼は、山水を心から愛し、閑寂の境地にひたりきろうとしているかの如くである。ちなみに彼は山水觀賞に、好んで幽賞、清賞、佳賞、賞心、賞愛などの語をあてている。

二

では、かく結果的には却つて憂愁を深めてしまうものであつたにも拘わらず、柳宗元が求め續けた山水の美とは一體どのようなものであつたのか。又どのような仕方で山水を觀賞したのであるうか。この二つの問題については、詩から歸納するよりも、彼の散文、山水記の記述を引く方がつとり早い。今煩を避けるため、一例ずつ具體的且つ簡明な敘述のある部分を舉げておこう。

日に其の徒と高山に上り、深林に入り、廻谿を窮む。幽泉怪石、遠しとして到らざる無し。到れば則ち草を披きて坐し、壺を傾けて酔う。……西山を望みて、始めて指さして之を異とす。遂に僕人に命じ、湘江を過り、染溪に緣り、榛莽を斫り、茅茨を焚き、山の高きを窮めて止む。攀援して登り、箕踞して遨べば、則ち凡て數州の土

壤、皆衽席の下に在り。

(二十九 始得西山宴游記)

彼は所謂誰しもが賞愛する名山水とか、人工の限りを盡した庭園に山水の美を求めたのではなかつた。彼は人知れぬ道なき山中をがむしやりに歩きまわることのなから美をさがし求めたのである。即ち、高い山に登り、奥深い林にわけ入り、くねつた谷をのぼりつめ、人知れぬ泉、奇妙な形をした石を求めては、どんなに遠くへでも出かけて行つた。そして道なき時は、やぶを切り拓き、いばらを焼きはらつても目的地にたどりつくという風であつた。

かくさまざまの苦勞をなめて求める山水の何處に彼の心を引きつけるものがあつたのか。「永州の龍興寺の東丘の記」(卷二十八)の冒頭には、次の如く要約されている。

游の適し、大率二つ有り。曠如也。奥如也。斯くの如き而已。其の地の阻峭を凌ぎ、幽鬱を出で、寥廓悠長なるは、則ち曠に於て宜し。丘垤に抵り、灌莽に伏し、迫遽廻合なるは、則ち奥に於て宜し。

即ち、山水を跋涉する樂しさは、次の二點に盡きる。けわ

しい絶壁を登りきつた時、うす暗い所から抜け出た時の、
ばつと眼前に果しなく廣がる光景、丘にぶつかり、茂みの
中をくぐり、急にけわしくなつたり、うねうねまわつたり
するあの奥ゆきの深さにあるのだと。

これは、もはや王維の輞川もくわうの粹を盡した別荘における、
又韋應物の寺院や貴族の庭園、郊外にたたずんでの閑寂の
趣を愛するあの山水觀賞とは、全く別のものであるといつ
てよいだろう。そして柳宗元のこうした山水觀賞の仕方は、
普通に山水詩の祖と謂われている謝靈運（三八五—四三三）
に實はその類似を求め得るのである。宋書の列傳（卷六十
七）には、

出でて永嘉の太守と爲る。郡に名山水有り。靈運の素よ
り愛好する所なり。出でて守となり、既に志を得ず、遂
に意を肆はしいままにして遊遨ゆうたうす。諸縣を偏歴して、動もす
れば旬朔じゆんさくを踰こえたり。……山を尋ね嶺みねを陟のぼり、必ず幽
峻しゆんに造る。巖嶂千重、備つづさに盡さざるは莫し。

と記している。勿論、南朝きつての名門貴族謝靈運と、
永州の司馬に左遷されていた柳宗元とは、その規模にお

柳宗元詩考（寛）

いて、豪勢さにおいて、大きく相違していたであろう。
しかし、山水の觀賞が、社會からの消極的な逃避、つまり
隱遁者の樂しみではなく、山を尋ね嶺みねを陟のぼり、必ず頂上を
極めるといふ、所謂“山歩き”的樂しみであつた點、二
人は大きく共通したものをもつてゐる。恐らく柳宗元は謝
靈運の山水跋涉を意識していたに違ひない。といつても、
私はここで二人の“山歩き”を同一視してしまうつもりは
毛頭ない。その對し方は、柳宗元の場合、苦行の擧句に、
もしくは苦行のなかに求められる“樂しさ”であつた點、
その性質はたしかに違つてゐるし、又柳宗元のかかる、い
わば“野性の探求”は、恐らく南方の禪的色彩の濃い當時
の佛教ともつながりをもつてゐるものと思われるが、この
問題はなお多くの分析が必要であるし、目下の私の手にあ
まることでもある。（謝靈運との關係はなお後述する。）

三

上述の如く、王叔文派の失脚、直ちに永州の司馬へ左遷
という憂き目にあつた悲しみと憤り、十年にわたつての流

謫生活からくる不安と焦燥の中から生れた柳宗元の山水詩、しかも現實からすつかり逃避してしまふことが出來ず、すばらしい景色をさがし求めては、却つて憂愁を一層かきたてることになつてしまつた彼の山水詩、人工の美を擬らした庭園などではなく、前に觸れた清水氏の論文がいうごとく自分同様見棄てられた蠻夷の山水を荒々しく跋涉するなかで作り出された彼の山水詩は、一體どの様な描寫をもち、どのような特徴をもち、どのような優れた點をもつてゐるであらうか。

蘇東坡をして「憂中に樂有り、樂中に憂有り、蓋し古今に妙絶せり」と評せしめて有名な「南澗中に題す」(卷四十三)という詩がある。

秋氣集南澗 秋氣 南澗に集まる

獨遊亭午時 獨り遊ぶ 亭午の時

廻風一蕭瑟 廻風 一たび蕭瑟たれば

林影久參差 林影 久しく參差たり

始至若有得 始め至りて得る有るが若く

稍深遂忘疲 稍や深うして遂に疲れを忘る

羈禽響幽谷 羈の禽は幽谷に響き

寒藻舞淪漪 寒き藻は淪漪に舞う

去國魂已游 國を去つて魂は已に遊び

懷人淚空垂 人を懷しんで涙は空しく垂る

孤生易爲感 孤生 感を爲し易く

失路少所宜 路を失いて宜しき所少なし

索寞竟何事 索寞 竟に何をか事とせん

徘徊祇自知 徘徊 祇だ自から知る

誰爲後來者 誰か後來の者と爲す

當與此心期 當に此の心と期すべし

秋の氣がみちている南の澗に眞晝ごろ獨りでやつて來た柳宗元は、「始め至りて得る有るが若く、稍や深うして遂に疲れを忘る」という。つまり、ここへ來たばかりの時、已に何か心に觸れるものがあつたが、だんだん奥へ進むにつれて疲れも忘れてしまふほどであつたのだ。だが、そこで彼の耳に入り、目に止つたものは、うす暗い谷間にこだまする羈の鳥の啼き聲と、さざ波にもてあそばれてゐるわびしげな藻であつた。「羈禽 幽谷に響き、寒藻 淪漪に舞

う」。そして以下は、彼の孤獨と悲歎の告白が縷々と述べられる。

第一節で述べた如く、この詩も山水の美をたずねあてながら、その奥如たる谷川を歩きながら、結局その美しさとけこむことが出来ずに、後半は歎きの告白で綴られてしまつてゐる。わずかに述べられる第二聯、第四聯の紋景も、山水の美觀をすなおに詠んだものではない。特に第四聯などは、「疲れを忘れ」させるほどの境にやつて來ながら、片時も心を離れることのない長安への思慕と流謫の身の現實が、小鳥のさえずりも故郷を離れた旅の鳥に思われ、清流に洗われる藻もわびしげに流れに翻弄されているようにしか映らないのである。そしてこの悲しげに啼く群を離れた鳥と、流れに翻弄されているみずばらしい藻こそは、長安を追われて遠く永州の山中をさまよう柳宗元自身なのである。

少しく比較をすれば、鳥の聲は、韋應物もしばしば詩に詠んでいる。しかしそれを耳にする詩人の心情は全く違つてゐる。例えば第二節で擧げた「郡中には山水多く、日夕

幽禽を聴く」(韋蘇州集卷七 南園陪王卿遊囑)や、「澹然として山景晏れ、泉谷に幽禽響く」(卷五 答馮魯秀才)にしても、更にはもつとよく似た句「繁華陽嶺を冒い、新禽幽谷に響く」(卷七 題鄭引憲侍御遺愛草堂)にしても、韋應物は鳥の聲に聞き耳を立てながら、その音を愛し、美しい山水の閑寂の境地にひたつてゐる。啼いている場所がともに幽谷であつても、韋應物のは奥深い靜かな谷の謂であり、柳宗元のはうす暗い陰氣な寂しい谷の謂なのである。兩者の山水に對する心の持ち方が根本的に違つてゐる以上、これはむしろ當然なことであらう。

柳宗元の描くものは、華やかな又は和やかな自然とは縁遠く、うらぶれた又は嚴しい自然の姿であることが多いのは、當然といつてよい。已に指摘したように、如何に美しい風景に出會つても、彼の憂愁は決して晴れることがなかつたからである。ともすれば「南園中に題す」詩のように、草や鳥に詩人自身の不運な境遇を托したりする。しかし、このことは決して彼の詩が、彼の描く自然が、常に美しくないということではない。むしろ、彼にはそうした寂しい

又は嚴しい自然のみがもつてゐる美しさを、その時の詩人自身の心境をにじみださせつつ巧みに描きだしてさへいる。たとえば「石角に遊びて小嶺を過ぎ長烏村に至る」と題する詩（卷四十三）の一節を次に引いてみよう。

磴廻茂樹斷 磴は廻りて茂樹斷え

景晏寒川明 景は晏れて寒川明らかなり

曠望少行人 曠かに望めば行く人は少に

時聞田鸛鳴 時に田鸛の鳴くを聞く

風篁冒水遠 風篁は水を冒いて遠く

霜稻侵山平 霜稻は山を侵して平らかなり

石だたみが曲るところで茂つた樹木は絶え、夕やみがあたりをつつもうとするなかに、さむざむとした小川の流れがちかちかと光を反射させている。果しなく續く曠野には人影もなく、時おりこづるの鳴き聲がこだまするばかり。風にそよぐ竹が水面をおおつて遠くにかすみ、霜のおりた稻が山に食いこんでどこまでも平らに波うつてゐる。この詩は第一節で引いたように、ほとばしり出る激しい怒りと悲しみが、永い流滴生活のなかである収まりを見せ、一種

のあきらめにも似た氣持さえ示している作品である。夕やみにちかちかと光つて流れる小川、そして時おり聞える田鸛の鳴き聲が一層人氣の途絶えたあたりの静けさをきわだたせ、風篁、霜稻の荒涼とした遠影が、うつろな詩人の心を巧みにとらえている。

所で、柳宗元の山水詩は、このような嚴しい自然、その巧みな表現がすべてではない。第二節で述べたような彼が最も美しいと感ずる、所謂曠如なる奥如なる山水に對した時の身のひきしまるような清冽な描寫こそ、彼の詩がもつ大きな特徴の一つであるといつてよい。「蒲洲の石磯に登り、横江口を望めば、潭と島は深く迥かにして、斜めに香零山に對す」（卷四十三）の前半を引いてみよう（後半は第二節を参照）。

陰憂倦永夜 陰き憂いは永き夜に倦み

凌霧臨江津 霧を凌して江の津に臨む

猿鳴稍已疎 猿の鳴くこと稍く已に疎なり

登石娛清淪 石に登りて清淪を娛しむ

日出洲渚靜 日出でて洲渚靜かなり

澄明晶無垠 澄明 晶かがやきて垠かきり無し

浮暉翻高禽 浮ひかりべる暉ひかりは高たかき禽ひるがを翻かえし

沈景照文鱗 沈しずめる景かげは文あやある鱗うろこを照あす

雙江匯西奔 雙ふたつの江かほは匯あまつて西あに奔はり

詭怪潛坤珍 詭怪きかい 坤くの珍たまを潛ひそむ

孤山乃北峙 孤山 乃すなはち北きたに峙たち

森爽棲靈神 森爽しんそうとして靈神れいじんを棲すましむ

洄潭或動容 洄潭 或またいは容かたちを動うごかせば

島嶼疑搖振 島嶼とうしよ 搖ゆれ振ふるえるかと疑うう

重苦しくのしかかる憂愁に眠れぬまま霧をついて川岸に

立つ柳宗元は、静まりかえつた清澄な谷川の夜明けの感じ

を實に鮮明に寫しだしている。もの哀しい猿の聲もようや

く收まり、岩の上に登つて清らかな波紋を楽しんでいると、

やがて静まりかえつた水際に、太陽がのぼり、明るく澄ん

だ水に光がかぎりなくきらきらと映りだす。空中に浮ぶ光

は高い所をかける鳥に反射し、水中にゆらめく光は魚の鱗

を照し出す。二本の川はぐるりとまわつて西へ流れ、大地

の珍らしい物質をその中にひそめ、香零山は北側にそばだ

つて神靈が棲んでいるかの如き莊重な感じを與えている。

よどんだ淵がときに水面を動かすと、島々もゆれ動くよう

な錯覺をおこさせる。こうした身も心もひきしまるような

描寫は、確かに夜明けの川邊のものではある。しかしこの

詩には、單なる谷川の夜明けの風景だけからは生れないあ

る嚴いしさをもっていることも又確かである。それは、この

詩の後半に「信に美なれども安んずる所に非ず、羈し心し壓し

ば逡巡す」云々（第二節參照）ともいう如く、眠られぬ夜を

過した柳宗元の心にますます深まり高ぶりつつある神經が、

言葉のはしばしにびりつと張りつめているところから來て

いる。そしてそれが清冽な夜明けの谷川の風景と相いまつ

て、この詩に一層のつきつめた鋭さをもたしているとい

つてよい。

次にあげるいくつかの描寫も、その美しい景色を描きつ

つ、實際にはそれを鑑賞することの出来ない彼の心の空し

さを一層きわだたせている例である。

高巖瞰清江 高き巖より清江を瞰みおろせば

幽窟潛神蛟 幽ひそき窟くには神蛟しんぎやうを潛ひそましむ

開曠延陽景 開曠 陽景を延き

廻薄攢林梢 廻薄として林梢を攢む

(卷四十四 遊朝陽巖遂登西亭二十韻)

高い巖の上からすがすがしい江をみおろすと、うす暗い洞窟はみずちがひそんでいるかの如き無氣味さをたたえて静まりかえつてゐる。眺めはさつと開けて太陽の光がのび、そのさきは木々の梢が重なりあつて、廻薄としてうちふるえている。

これは第三節で述べた所謂「曠如」たる光景の一つであるが、この詩の後半は「惜しむらくは吾が郷土に非ず」云々に始まる左遷されるまでの簡單な経緯と現在の苦悶の心境が述べられる。つまり詩の主題というか中心は、むしろ彼の心の表白にあつて、山水の描寫にはない。

九疑濬傾奔 九疑 傾奔を濬くし

臨源委縈廻 臨源 縈廻を委す

會合屬空曠 會合 空曠に屬し

泓澄停風雷 泓澄 風雷を停む

高館軒霞表 高館 霞表に軒り

危樓臨山隈 危樓 山隈に臨む

茲辰始激霽 茲の辰 始めて激霽

纖雲盡褰開 纖雲 盡とく褰開す

天秋日正中 天秋にして日正に中し

水碧無塵埃 水碧くして塵埃無し

杳杳漁父吟 杳杳たり 漁父の吟

叫叫羈鴻哀 叫叫として羈鴻哀し

(同 湘口館瀟湘二水所會)

九疑山に深い裂け目をつくりつつほとばしりでる瀟水と、臨源山の地勢にまかせてうねうねと曲りながら流れる湘水が落ち合うのは視界がからりとひらけたところで、水も空も深く澄みわたつて風や雷も鳴りをひそめる。そんな所に、湘口館がもやの上にそびえたち、高樓が山のくまをみおろしている。やつと晴れあがつたのはこの時、うすい雲さえずつかり消え失せてしまった。そらは秋、太陽が丁度眞上にあり、水はまつさお、ちり、一つ見えない。漁夫の歌聲がかすかな餘韻をたたえて聞えてくる。たびの水鳥のキョウキョウたる啼き聲がもの哀しい。急にくつきりと晴れあが

つた空、まつさおな水、雨後の清々しい空氣の中につたつてゐる詩人の心は、それが憂愁をさつぱりとぬぐいさつてしまふような風景であるだけに、一層とぎすまされてしまふ。本來ならばのどかに感ずべきはずの漁夫の歌聲と水鳥の鳴き聲が、詩人の心につきささつてゐる。この詩の後半は、必然的に「境勝れたれば豈に豫しまざらんや、慮いは分れて固に裁ち難し」云々（第一節参照）の語をはきださざるを得ないのである。

遠岫攢衆頂 遠岫 衆頂を攢め

澄江抱清灣 澄江 清灣を抱く

夕照臨軒墮 夕照 軒に臨みて墮ち

棲鳥當我還 棲鳥 我に當つて還る

菡萏溢嘉色 菡萏（はすの花）は嘉色を溢らせ

簞簞遺清班 簞簞（竹の一種）は清班を遺せり

（同 構法華寺西亭）

この描寫がやはり「賞心久しく留め難く、離念來つて相い關わる」云々の言葉に終るのは第一節に引く通りである。

以上舉げた三首の描寫は、その前の「蒲洲の石磯に登る

柳宗元詩考（寛）

……」詩とともに、いずれも高い所からの眺望であり、いずれも澄みきつた水の流れをもつことによつて、その詩にきりつとした清冽さを生んでゐる。しかもその裏には、ぬぐい切れぬ怒りと悲しみ、孤獨と寂寞の感情が絶えず高ぶり、遂には押え切れなくなつた感情を直接詩にぶつつけるという形式を常にもつてゐるために、清冽な描寫に一層の嚴しさ、鋭さをもたらす結果となつてゐる。ついでにいえば、彼の最もポピュラーな詩の一つ「漁翁」などは、上述のような詩とは少し別の種類に屬するもので、彼の山水詩の描くものが常に自分の目や心から見た自然であり、しかも自己以外の人間は原則として誰も登場しないのと違つており、しかも自己の直接の告白もないという形式、恐らく畫讀のようなものであつたろうが、このような嚴しさ鋭さをもつた清冽な山水描寫の一つの極致であらう。

これまで考察して來た如く、柳宗元の山水詩は、山水の描寫に重點がおかれてゐるのではなく、むしろ山水描寫を足掛りとして直接自己の内面の苦痛を訴える方にもつぱら重點が移つてしまつてゐるといつてよい。しかもどんな美

しい風景に接してもふりきることの出来ぬ憂愁は、絶えず詩に悲壯な緊張感を興えている。その山水描寫は、ある場合には山水のわびしいうらぶれたもののなかにみずからの境遇を托して、久しい孤獨と寂寞の念を強め、又ある場合には清冽な描寫によつて自己のときすまされた鋭い境地を表現する。彼の山水詩は、王維の如く純粹に自然の美を追求するものではないし、又閑適の情、すなわち餘暇を楽しむ心なども、全く無縁であるこというまでもない。

ところでこのような柳宗元の詩がもつ憂愁は、第一節でも述べた如く、自分が左遷されたことに對する憂愁であり、ひたすらそれをのみ追いつづけ、くりかえしていて、その憂愁が、さらに發展して廣く死の問題とか、人間の生き方といった面にまで深められてゆく餘裕は殆んどもつていないことは注目すべきである。なるほど、「衰えたるを覺ゆ」(卷四十三)という詩は、死に對する恐れをもたげさせてはいるが、「彭聃^{ほうたん}安^{やす}くに在る哉^や、周孔^{しゅうこう}も亦已に沈^{しん}めり、古^{いにし}え壽聖と稱する人も、曾て留まりて今に至らず」と割り切つてしまつてゐる。^{注⑨}しかもこうしたことを問題にする詩は、

山水詩に限らずその全詩集から見てもむしろ例外であり、その悩みの範圍は狭く、あくまでも現在の自己の境遇のみに止まつて、廣く人々の苦しみへと進むことは殆んどなかつたといつてよい。それだけに、小川環樹教授が說かれてゐる如く、彼の到達した境地はいつそう深く、つきつめた鋭さにおいて、元和期の大詩人、韓愈や白居易に勝るものとはなつたけれども(中國詩人選集「唐詩概説」七十二頁)、韓白の詩のような一般性をもたず、彼らほどには、^はばのひろい讀者を持たない原因にもなつたといえる。又根本的な意味では、ずつと深い悩みをもつていた陶淵明の自然を詠じた詩がもつ、ある種の濫かみ、ゆとり^{ゆとり}に缺けるのも、自然の中にとびこみながら、一定の距離をもつてしか接することの出来なかつた柳宗元にとつては、しかたのないことだつたのかもしれない。

四

柳宗元の詩、ことにその山水詩が最も大きな影響を受けてゐるのは、王維や韋應物などではなく、むしろ普通に山

水詩の祖といわれている劉宋の謝靈運（三八五—四三三）であつたと考えられる。柳宗元はこの南朝の詩人を大變尊敬し、意識してその詩から多くのものを學びとらうとしている。ただ彼が謝靈運又はその詩に直接言及することは、詩の中では全くなく、わずかに散文の方に一例、それもごく簡單な言及があるだけである。

吾輩は常に靈運明遠の文雅を希えり。

（卷二十五 送文暢上人登五臺遂遊河朔序）

六朝の支道林、慧遠えいぜんなどの高僧が名士と交遊をもつた如く、時の優れた士大夫と交遊をもつ文暢上人を送るに當り、常々謝靈運、鮑明遠（照）の文雅を願つてゐる私が詩を作つて序を書くことになつた、というのがこの「序」の大意である。ところでこの「序」が失脚する前、長安時代に書かれたものであることは一應注意を要する。それは柳宗元の文學觀が、長安時代と永州左遷以後とは大きな變化を見せてゐるからである。即ち、左遷後、自己の理想を政治の上で實現させる手段を奪われてしまつた彼に残されたものが文學だけであつたことと、永州の司馬という閑職が、彼

柳宗元詩考（寛）

に人生をみつめ、じつくり學問をやりなす機會を與えたことがその主な原因である。かくして彼の文學に對する價値の比重は急に増大する。^{註⑥}最初に述べたように長安時代の作品は殆んど傳わらないために、當時の詩がどんな影響の下にあつたかは不明であるが、流滴生活の中で生れた山水詩には、やはり謝靈運の影響を顯著に認めうるのである。

その第一は、山水觀賞の方法である。謝靈運は永嘉の山水を、柳宗元は永州の山水をいづれも大きな不滿を心に抱きつつ、がむしや、らに歩きまわることによつてすぐれた數々の山水詩を生んだ。このことは第二節で已に述べたのでここにはくり返さないが、柳宗元の山水跋涉が永嘉の名山水を求めて肆いままに遊邀した謝靈運を意識してのものであつたことは確實である。

その第二は、詩の題のつけ方である。謝靈運は鈴木虎雄博士が「山水文學と謝靈運」（『支那文學研究』所收）のなかで指摘しておられるように、從來の詩人たちがあまり意をはらわなかつた詩の題にも工夫をこらし、はじめて題にも詩としての大きな役割りをもたせた詩人である。即ち、こ

れまでの「贈……」「答……」といった簡単なものや、長くても單に作詩の經緯を語るに過ぎなかつたものから脱け出して、詩の美を作りあげる重要な要素として詩の題を活用したのである。あるものは散文的となり、山水記的な役割りを果しているものさえある。「文選」に收められているものからいくつかを列舉してみよう。

「赤石に遊び、進んで海に帆す」(文選 卷二十二)

「南山より北山に往き、湖中を経て瞻眺す」(同)

「斤竹澗より嶺を越えて溪行す」(同)

「華子岡に入る、是れ麻源の第三谷なり」(卷二十六)

「石門に新たに住む所を營む、四面は高山・廻溪・石

澗・茂林・修竹なり」(卷三十)

このような詩としての重要な役割りを負つた、時には散文化した「題」は、柳宗元によつて明らかに意識的に學ばれている。前節で何度か引用したが、今一度まとめて録しておこう。

「朝陽巖に遊び、遂に西亭に登る二十韻」

「湘口館は瀟湘二水の會する所なり」

「蒲洲の石磯に登り、横江口を望めば、潭島深迥にして、斜めに香零山に對す」

「石角に遊びて小嶺を過ぎ、長烏村に至る」

「秋曉に南谷を行きて、荒村を経たり」

「雨後に曉行して獨り愚溪の北池に至る」

(以上いずれも卷四十三)

尙、この點に關しては、最近では葉笑雪氏にも簡単な指摘がある。

靈運不但把詩寫得更像詩，就是一向不爲人注意的詩的題目，也被他寫得富有詩意，如『於南山往北山，經湖中瞻眺』等，它本身簡直就是詩。靈運這一手絕活，只有唐柳宗元能得其彷彿。

謝靈運は詩を一層詩らしく書いたのみならず、これまで人の注意を引かなかつた詩の題目についても、詩意に富んだものに書きあげた。例えば「南山より北山に往き、湖中を経て瞻眺す」などは、それ自體がそのまま詩なのである。謝靈運のこの獨特な手法は、ただ唐の柳宗元のみがおもかげをしるのばせることが出來た。

(「謝靈運詩選」前言一六頁 一九五七・十二)
上海古典文學出版社

その第三は、詩の構成である。前節で説いた如く、柳宗元の詩は、前半に山水の描寫をし、後半に自己の苦しみを訴えるという形をとるものが多いが、こうした構成もやはり謝靈運の影響を受けたものであると思われる。今、謝靈運の「七里瀨」（文選卷二十六）と題する詩を引いておこう。

羈心積秋晨 羈心 秋晨に積り

晨積展遊眺 晨に積りて遊眺を展ぶ

孤客傷逝湍 孤客 逝湍を傷み

徒旅苦奔峭 徒旅 奔峭に苦しむ

石淺水潺湲 石は淺くして水潺湲たり

日落山照曜 日は落ちて山照曜す

荒林紛沃若 荒林 紛として沃若たり

哀禽相叫嘯 哀禽 相い叫嘯す

遭物悼遷斥 物に遭いて遷斥を悼み

存期得要妙 期を存して要妙を得

既乘上皇心 既に上皇の心を乗る

豈屑末代誚 豈に末代の誚りを屑りみんや

目覩嚴子瀨 目に嚴子の瀨を覩

柳宗元詩考（寛）

想屬任公釣 任公の釣を屬せんことを想う

誰謂古今殊 誰か謂う 古今殊なりと

異代可同調 異代 調を同じうすべし

この時やはり左遷の憂き目にあつていた謝靈運の前半八句の山水描寫は、前節で引いた柳宗元の「蒲州の石磯に登りて……」の描寫とよく似た手法がとられており、このような詩から柳宗元は多くのものを學んでゐるに違いない。そして第九句「物に遭いて遷斥を悼み」以下は、一轉して、自分の今の境遇に對する悲しみと、老莊的生活へのあこがれが述べられる。勿論その感慨の内容は大きな隔たりをもっているが、しかし、前半は山水描寫、後半は感慨を語るといふ構成はほぼ同じである。先に詩題を列舉したものも大體同じであり、「晩に西射堂を出す」「南亭に遊ぶ」「石壁精舍より湖中に還る作」「石門の最高頂に登る」（以上文選卷二十二）、「江中の孤嶼に登る」（卷二十六）などすべてこの形式をとつてゐる。

以上、特に顯著なものとして三つの傾向を指摘したが、これによつても、柳宗元の謝靈運への傾倒が並み並みなら

ぬものであつたことがうなずけよう。勿論このことは、柳宗元が謝靈運から多くのものを學んでいるということであつて、二人の詩が質的にも同じだというわけではない。むしろその差異を明らかにすることによつて柳宗元の詩の特徴はより一層明らかにされるはずである。その分析は、なお後日に期したい。

五

かく謝靈運の詩風の影響を大きく受けている柳宗元は「詩はどうあるべきか」について如何なる考えを持つていたのであろうか。又過去の詩人についてはどのような評價を下していたのであろうか。だがこのような質問に對する柳宗元自身の回答はあまりなされていない。詩に關する直接の議論は、彼の詩集からは全く見出すことは出来ないし、散文の方でもその考えをうかがうことの出来るものは斷片的なものを含めて僅かに三例ばかりあるだけである。

その一つは、前章で舉げた

「吾輩常に（謝）靈運（鮑）明遠の文雅を希う」

である。

その二つは、やはり斷片的なもので、元和四年、永州にあつて、當時京兆尹、即ち長安市長をしていた妻の父楊憑（ひょう）にあてた書簡の一節である。

「古えより文士の多き、今に如くは莫し。今の後生、文を爲りて、屈（原）・（司）馬（相如）を希う者は、數人を得べし。王褒・劉向の徒を希う者は、又十人を得べし。陸機・潘岳の比に至つては、累累として相い望む。若し皆之を爲して已まざれば、則ち文章の大いに盛んなる、古え未だ有らざる也。」

（卷三十 與楊京兆憑書）

この議論は、ひろく文學者としての評價を加えたものであつて、詩と散文に分けての上でなされたものではないが、西晉の詩人、陸機や潘岳に對する彼の評價がいかにうたつたかは大體見當がつく。

その三つは、岳父楊憑の弟楊凌の文集に書いた序文で、彼の詩に關する直接の議論を含むものとして唯一の資料で

ある。

「文の用は辭令褒貶・導揚諷諭のみ、其の言鄙野なりと雖ども、以て用に備うるに足れり。然れども其の文采を闕くときは、固より以て時聴を疎動し、後學に夸示するに足らず。言を立てて朽つること、君子は由いざる也。故に作者は其の根源を抱きて、必ず是に由つて道を假る焉。聖に作らる、故に經と曰う。才に述べらる、故に文と曰う。文に二道有り。辭令褒貶は著述に本づく者也。導揚諷諭は比興に本づく者也。著述者流は、蓋し書の謨訓、易の象系、春秋の筆削に出でたり。其の要は高壯廣厚にして、詞正しく理備わるに在り。宜しく簡冊に藏むべきを謂う也。比興者流は、蓋し虞夏の詠歌、殷周の風雅に出でたり。其の要は麗則清越にして、言暢び意美わしきに在り。宜しく謠誦に流うべきを謂う也。茲の二者は、其の旨義を考うるに、乖離して合わず。故に筆を乗るの士は、恆に偏え勝り獨つ得て、兼ねること有る者罕なり焉。厥れ能にして美を専らにする有るを、之に命けて「藝成る」と曰う。古え文雅の盛んなりし世と雖ども、

柳宗元詩考（寛）

肩を並べて生ずること能わず。唐興りしより以來、是の選に稱うて忤じざる者は、梓潼の陳拾遺のみなり。其の後、燕文貞は著述の餘を以て比興を攻むれども能く極むる莫し、張曲江は比興の隙を以て著述を窮むれども備うる克わず。其の餘の各おの一隅を探りて相い興に道に背馳する者は、其の去ること彌い遠し。文の兼ね難きこと斯れ亦甚し矣。

（卷二十一 楊評事文集後序）

この序は専ら「詩」のみについて論じたものではなく、詩と散文を含んだ「文」についての論であるが、「文」とは如何にあるべきか、散文と詩はそのうちの如何なる部分を受けもつべきであるかを、原則論的にはあるけれども、非常にはつきり述べたものとして注目に値する。その要點をいえば、「文」の目的は、辭令褒貶、導揚諷諭に在り、そのうち散文（著述者流）は辭令褒貶を、詩（比興者流）は導揚諷諭を目的とする。そして散文は雄大で堂々とし、詞は正しく理路整然としてゐることが肝要であり、後世史書に收めらるべきものを謂う。詩は綺麗で韻律にかなひ、言

のはびやかで内容の美しいことが肝要であり、歌つたり朗誦したり出来るものを謂う。従つてこの兩者は、その主旨内容から考えて、相い反した才能を必要とするために、散文と詩の兩方に勝れるということはなかなか難しく、古文雅の盛んな時代でもなかつた。唐が興つてから、この二つに兼ねずぐれてゐるのは陳拾遺、即ち陳子昂（六六一—七七—七三〇）や、張曲江即ち張九齡（六七八—七四〇）が出たけれども、前者は詩に、後者は散文にすぐれることが出来なかつた。

この明快なる議論は、彼の詩についての考えを知る上でいくつかの重要な問題を含んでゐると考えられる。そのまづ第一は、散文と詩が受けもつ役割りをはつきりと指定していることである。即ち、辭令褒貶は「散文」で、導揚諷諭は「詩」でというこの考え方は、一見しごく當りまえな、常識的な議論のようであるが、實はこの點にこそ、韓愈と柳宗元の詩風が大きく分れるポイントがあつたのである。北宋の黃庭堅（一〇四五—一一〇五）が、「韓愈は文を以て

詩を爲つた」と評したように、韓愈が、詩のなかに散文的な要素を多く取り入れ、詩の形式を借りて議論を展開するといふ、所謂宋以後の詩風を開く基をなしたことは、よく人々の説くところであるが、柳宗元は、詩がそうした方向へ發展することには反對だつたことをこの論は示すものではないか。例えば、韓愈の場合、詩についての考えや過去の詩人に對する評價が最もよくうかがえるのは「士を薦む」と題する詩（韓昌黎集卷二）であつて、詩經以來の詩の歴史が、その前半二十四句を費して堂々と論じられている。

周詩三百篇 周詩 三百の篇

雅麗理訓誥 雅麗にして訓誥を理む

曾經聖人手 曾て聖人の手を経たり

議論安敢到 議論 安くんぞ敢て到らん

五言出漢時 五言は漢の時にいで

蘇李首更號 蘇（武）と李（陵）と首めて更にも號ぶ

東都漸瀾漫 東都（後漢）にいたりて漸く瀾漫し

派別百川導 派 別れて百川を導く

建安能者七 建安に能くする者七たり

卓犖變風操 卓犖として風操を變ず
 逶迤抵晉宋 逶迤として晉宋に抵りて
 氣象日凋耗 氣象 日に凋み耗えたり
 中間數鮑謝 中間 鮑（照）謝（靈運）を數う
 比近最清奧 比近にては最も清くして奧し
 齊梁及陳隋 齊梁 及び陳隋
 衆作等蟬噪 衆作は蟬の噪ぐに等し
 搜春摘花卉 春を搜して花と卉を摘み
 沿襲傷剽盜 沿い襲いて剽め盜めるを傷む
 國朝盛文章 國朝 文章盛んなり
 子昂始高蹈 （陳）子昂 始めて高く蹈む
 勃興得李杜 勃興して李（白）と杜（甫）を得たり
 萬類困陵暴 萬類 陵暴に困しむ
 後來相繼生 後來 相繼いで生じ
 亦各臻閭奧 亦 各おの閭の奥に臻る
 ところが柳宗元から見れば、やはりこのような議論は詩という形式をかりてなさるべきものではないと、考えていたと思われる。さきに述べたように、柳宗元の詩に、詩に

柳宗元詩考（寛）

關する議論や意見が全く見られないというのも、實は單なる偶然ではなかつたのである。従つて、一見常識的に見えるこの議論の裏には、この當時の韓愈の行き方に對する批判が含まれていることを讀みとらねばならないであらう。ちなみに韓愈の「士を薦む」詩は、孟郊が進士に及第する貞元十二年（七九六）より前に作られたものである。

第二は、過去の詩人に對する評價である。柳宗元が、陳子昂に詩文に兼ね優れた人として、過去の文人中最大の評價を與えていることは、まず良いとして、陳子昂のあとに、散文に優れた人として張説を、詩に優れた人として張九齡を擧げていることは、今日の我々の文學史的常識からすれば、非常に奇異な感じを與える。というのは、韓愈が「國朝文章盛んなり、子昂始めて高蹈す、勃興して李杜を得たり、萬類陵暴に困しめり」と論じているように、陳子昂のあとには、當然李白（七〇一―七六二）、杜甫（七一二―七七〇）が來るべき所だからである。だが、柳宗元はこの二人の偉大な詩人には全く觸れようともしていない。もつとも李白、杜甫は、文章家としては成功しなかつたから、この

序にはしいてとり挙げなかつたといえ、それまでであるが、しかし單純にそれだけでは説明しきれないものがあることも確かである。當時の李白、杜甫に對する一般の評價を考へてみるに、白居易（七七二—八四六）の「元九に與うる書」（白氏長慶集 卷四十五）や、元稹（七七九—八三二）の「唐の故の工部員外郎杜君墓係銘并序」（元氏長慶集 卷五十六）が示しているように、已にかなりの名聲を博していたことがうかがわれるが、なんといつても當時に於て李白、杜甫を最も高く稱揚したのは韓愈であつた。それは「新唐書」杜甫傳の贊が、

「昌黎の韓愈、文章に於ては許可に慎むも、歌詩に至つて獨り推して曰く、『李杜文章在り、光焰萬丈長し』と。誠に信ず可し云」

と注意し、更にそれを引いた南宋の洪邁（一一一三—一二〇二）が「容齋隨筆」（四筆）で、李杜に言及した詩句を抜き出しているように、韓愈は、李白、杜甫の偉大さをいち早く認めて、盛んに二人の功績を讃めたたえ、詩の中だけで實に七度も言及するほどの力の入れようであつた。

「勃興して李杜を得たり、萬類陵暴に困しむ」

（韓昌黎集卷二 薦士）

「近ごろ憐れむ李杜が檢束無きことを、爛漫として長く酔いて文辭多し」

（卷三 感春第二首）

「昔年李白杜甫が詩を讀むに因りて、長く恨む二人の相い從わざることを」

（卷五 醉留東野）

「高く羣公を揖して名譽を謝し、遠く甫白を追いて至誠を感ず」

（卷五 酬司門盧四兄雲夫院長望秋作）

「少陵人無く謫僊は死す、才薄くして將に石鼓を奈何せん」

（卷五 石鼓歌）

「李杜文章在り、光焰萬丈長し」

（卷五 調張籍）

「蜀雄李杜拔んず（韓愈）嶽力雷車轟ろく（孟郊）」

（卷八 城南聯句）

從つて、柳宗元が、當時に於て高まりつつあつた李白、杜甫の評價、なかならず韓愈のそれを知らなかつたはずはない。彼はわざと默殺したのである。單にこの「序」で挙げなかつただけではなく、柳宗元は、現在傳わる全詩文を通じて、李白、杜甫に關する言及は全くしていないし、又彼

の詩作品にも二人の顯著な影響は認め難いのである。このことは、柳宗元が、當時の世評通り、又韓愈の主張するごとく李杜を評價することには賛成していなかったことを示すものといえるであろう。

ここであらためて考えてみなければならぬのは、陳子昂に對する柳宗元の理解の仕方である。即ち陳子昂に與えた最高の評價の中に、彼が詩文の復古革新を叫んだという歴史的意義を、柳宗元がどれだけはつきりと認識していたかという問題である。勿論この「序」だけで判斷することは非常に危険ではあるが、この點で柳宗元の認識はひどく曖昧であるといえよう。陳子昂の主張を、實際に詩の中で實行し、すばらしい成功を収めた李白や杜甫を彼が評價しないのも、柳宗元が、韓愈の如く詩經以來の詩の發展の流れを正しく把握していなかったことによるのではないだろうか。杜甫を評價しないのは、韓愈が詩の中で議論をするというものと杜甫が開いたということもあるだろうが、それだけでは、解けない問題である。

さすればこそ、古文運動の領袖とされる柳宗元が前節で

柳宗元詩考（寛）

述べた如き、六朝の謝靈運に對して傾倒したこともある程度説明がつくのではないか。韓愈は、みずから把握した詩の發展の流れの上に立つて、李白や杜甫が完成した「詩」を更に乗り越えてゆこうとする努力を懸命にはらつた。そして彼は、從來の詩がもたなかつた新しい内容をもつたものを、新しい表現で示すことによつて、李杜によつて一應頂點に達した詩に、更に別の新しい要素をつけ加えてゆくことに成功した。所が韓愈の如き詩の發展の流れをしつかりと把握していなかつた柳宗元が、李杜を乗りこえて、新しい方向を求めようというような積極的な意欲をもたなかつたのはむしろ當りまえのことだつたのではあるまいか。柳宗元の詩が、韓愈のように古文運動と關係づけて論じられることがないのは當然のことといつてよいだろう。又この問題は韓柳兩人の古文の主張に微妙な差異があることも大いに關係するはずであるが、これに關しては又別の機會を待ちたい。

注① 「王孟韋柳」という呼稱が、いつ誰によつて始まつたのか、

今一つ詳らかではない。王維と韋應物が併稱されるのは晩唐の司空圖に始まる。

右丞・蘇州、趣味澄澹、若清沈之貫達、

(司空表聖文集卷一 與王駕評詩)

王右丞・韋蘇州、澄澹精緻、格在其中、豈妨於適舉哉、

(同卷二 與李生論詩書)

又、韋應物と柳宗元を併稱するのは北宋の蘇軾がそのはじめてである。

李杜之後、詩人繼出、雖有遠韻、而才不逮意、獨韋應物・柳子厚、發纖穠於簡古、寄至味於淡泊、非餘子所及也、

(漁隱叢話卷十九)

そして管見によれば、この四人が併稱される最も早い例は、南宋初期のものである張戒の「歲寒堂詩話」である。

李義山・劉夢得・杜牧之、三人筆力、不能相上下、大抵工律詩、而不工古詩、七言尤工、五言微弱、雖有佳句、然不能如韋柳王孟之高致也(卷上)

故に、少くとも南宋初期には、この四人の詩人が一括して呼ばれることがあつたことは確かである。

注② 詳細は錢穆氏「讀柳宗元集」(新亞學報Ⅲ-2 一九五八・

二) 参照。

注③ 卷四十三は後半の十數首を除いてすべて永州の詩であるが卷四十二の方では、永州時代の詩、都へ歸る時の詩、柳州へ赴任する時の詩、柳州時代の詩があつて、大體はそれぞれ一かた

まりになつてゐるものの、入り交つて並んでゐる所が數ヶ所ある。恐らくもとの形ではあるまい。卷四十三の終りについている「省試觀慶雲圖」などは明らかにのちになつて誰かの手でおこなわれたものである。

注④ 柳宗元は「舊唐書」では韓愈と同じ卷(二六〇)におかれてゐるが、「新唐書」では、王叔文一派の人々と同じ卷に入られてゐることも、その評價を示している。

注⑤ 肩字、宋の廖瑩中の世綵堂本では堅に作るが今従わない。なお、本論で引用するのは、原則としてこの世綵堂本によつてゐる。

注⑥ この語、他に用例を知らない。蔣之翘は潺は潺の誤りで、「劣る」の意とする。

注⑦ 今の東坡の集には見えぬが、南宋の魏仲舉が編した「五百家注柳河東集」にすでに引かれてゐる。

注⑧ 漁翁「漁翁夜傍西巖宿、曉汲清湘燃楚竹、煙銷日出不見人、欸乃一聲山水綠、迴看天際下中流、巖上無心雲相逐」この詩は蘇東坡が終りの二句はない方がよいと評したこと、その是非をめぐる色々な議論がたたかわされた。

注⑨ 人間の死を彼が如何に考え、處理してゐたかは、例えば「答周君巢餽樂久詩書」(卷三十二)などを讀めば、一層はつきりする。

注⑩ 柳宗元が永州に左遷される以前に書かれたものと断定しうるもので古文についての意見を述べた文章は全くない。長安時

代とは文學に對する考えかたが變つたことは、みずからしばしば告白している。そしてこのことは永州以前の詩が傳わらないこととも恐らく關係をもつてゐるであらう。

況今已無事、思報國恩、獨惟文章、（卷一 獻平淮夷雅表）
自貶官來、無事讀百家書、上下馳騁、乃少得知文章利病、

（卷三十 與楊京兆憑書）

僕之爲文久矣、然心少之不務也、以爲是特博奕之雄耳、故在長安時、不以是取名譽、意欲施之事實、以輔時及物爲道、

（卷三十一 答吳武陵論非國語書）

僕近亦好作文、與在京城時頗異、（卷三十三 賀進士王參元失火書）

始吾幼且少、爲文章以辭爲工、（卷三十四 答韋中立論師道書）

凡人好辭工書、皆病癖也、吾不幸蚤得二病、學道以來、日思砭鍼攻熨、卒不能去、（卷三十四 報崔黯秀才論爲文書）

注⑩ 黃魯直云、杜之詩法出審言、句法出庾信、但過之爾、杜之詩法、韓之文法也、詩文各有體、韓以文爲詩、杜以詩爲文、故不工爾、（後山詩話）